

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 西尾千尋

西尾論文は、年齢1歳前後のヒト乳児における独立歩行という運動の発達と、その運動が支える系列的行為の発達との関係を、N. Bernstein の動作構築理論および J. J. Gibson の生態学的心理学を援用しつつ明らかにすることを目的としている。論文は5つの章から構成され、3つの観察研究が含まれている。

第1章では、これまでの歩行発達研究を概観し、神経科学的、運動学的な観点に基づく実験的な研究では着目されてこなかった、歩行を可能にする資源や歩行が可能にする行為に関して、様々な物や人を含む日常生活の環境資源とのかかわりという観点から検討する必要性について主張している。そのために、身体の姿勢を保持する運動から複雑な系列行為までの運動を、運動の目的に直接関連する先導レベルと運動遂行を支える背景レベルの階層構造として理解する Bernstein の動作構築の理論について詳述し、さらに Gibson や E. Reed による生態学的心理学の観点に基づく、行為を可能にする資源に関する理論について検討を行っている。それらを踏まえ、歩行に関する少数要因を厳密に統制した実験的研究と、豊かな資源の中で生じる日常環境下における観察研究とが相補的に協力する必要性を強調し、本研究の立脚点を明示している。

第2章から4章では、実際の養育環境である家庭で観察された日常生活における歩行事例の検討が行われている。

第2章では、1名の乳児の歩行開始から3ヶ月間の縦断的な観察を行い、歩行の発達が、周囲の環境とどのように関わって起こるのかを、各家庭に固有な部屋の構造や物の配置に着目しながら明らかにしようとしている。その結果、歩行開始から日数が経過するにつれて、転倒回数は減り、長く歩けるようになった一方で、ごく短い歩行は継続して起こることを示した。複数の部屋にわたる歩行が出現した後にも、部屋の中の資源を利用するための狭い範囲での探索は続いており、歩行の発達は、乳児を取り巻く資源の探索行為の多様性の増加として捉えられるとしている。

第3章では、日常環境においては、歩行を始める際に、常に正面に向かってまっすぐ足を踏み出すとは限らないことを指摘し、運動学的な研究では扱われ

てこなかった、乳児が1歩目を踏み出す過程に焦点を当てている。3名の乳児の歩行開始から1ヶ月以内の事例検討を行っており、歩き出し方には、方向転換から始まるもの、つたい歩きからサイドステップで歩き出すもの、物を持ち上げつつ歩き出すものなど、周囲の物の配置と関わる多様なバリエーションがあることが示されている。これらのことから、独立歩行の開始にあたっては、姿勢の保持や、行く方向への定位といった背景レベルの運動があり、さらに歩行のための環境資源となる周囲の物の配置が背景レベルの運動を含めた歩行を制約していることを指摘した。

第4章では、歩行という運動の獲得と、物の配置替えおよび運搬の関係に焦点を当て、2名の乳児の歩行開始前後5ヶ月間の縦断的な観察を行い、歩行の開始後の物の運搬の性質の変化について分析を行った。その結果、歩行開始時より、同じ場所へ物を集める、重ねる等の繰り返される物の運搬や、運搬に続く物の手渡し、遮蔽の向こうへ物を取りに行くといった、移動開始時には見えていない物への特定の移動が発達していることが明らかになった。このことは、歩行の獲得とともに行為の時間スケールが変化して行為が系列化、階層化し、さらには環境の資源を共有する他者との能動的なかわりが発達していくことを示唆するものである。

第5章では、観察結果のまとめと総合考察が行われている。独立歩行の開始が背景レベルの姿勢保持や周囲の環境資源に支えられるとともに、歩行という移動運動が物の運搬、配置換え、手渡しなど様々な時間スケールを有する系列的行為の背景レベルとなり、さらにそれらの行為が背景となって乳児は能動的に他者と資源を共有する存在になっていくという階層的発達について議論している。

審査委員からは、Bernstein による動作構築の理論と Gibson の環境の実在論・環境における行為の資源の理論を、発達という観点から独自の視点で結びつけるより大きなパラダイムが必要であり、さらなる実証的データの積み重ねが必要となるとの指摘があったが、第1章の先行研究の展望から理論的検討までの構成がオリジナルな観点を提示していること、日常で起こる出来事を周囲の環境資源を含めて詳細にコーディングすることにより研究可能なデータとしていること、それにより今後の発達研究に新しい示唆をもたらすオリジナルな事実が見出されたことが高く評価された。よって本論文は博士（学際情報学）の学位請求論文として合格と認められる。

審査の結果の要旨

氏 名 本郷 太郎

(※履歴書の記載と同じにしてください。)

[illegible]

よって本論文は博士（〇〇〇）の学位請求論文として合格と認められる。

※「審査の結果の要旨」は、紙媒体を2部提出してください。

また、「PDF ファイル」及び「文書ファイル（Word 等で作成したもの）（省略可。）」の電子データも併せて提出してください。